

基調講演

大阪の舞踊—山村流の舞と踊り

東京大学 古井戸 秀夫

大阪の舞踊は、大きく分けて四つになります。江戸時代の前半、中ごろ、後半、そして明治以降です。江戸時代の三つを代表する舞踊家・振付は、日本伝助、佐渡島長五郎、山村友五郎です。共通しているのは、歌舞伎の振付をすると同時に、町のお師匠さんで子どもたちにも教えていることです。日本伝助は、三味線音楽で踊るということがなかった時代、あるいはようやく三味線が入り始めた時代です。佐渡島長五郎の時代は、三味線曲が充実していった時代。そして友五郎の時代は、三味線曲も大坂と江戸と二つの特色があるのですが、それを統合する時代になります。

代表的な弟子は、日本伝助の右近源左衛門。デビューした時は若衆歌舞伎の少年で、大人になって野郎歌舞伎の女形になった。いわゆる女形の祖と言われる一人です。『海道下り』という踊りでは、上野の東博に絵が残っておりますが、手と足を上げながら踊っています。特徴的なのは、菱川師宣の「見返り美人」のように、前を向いているのではなく、後ろを振り返っていることです。そういう行動的な女性の美しさが発見された時代でした。

次に佐渡島長五郎の時代は、嵐雛助です。『六歌仙』を初演した人です。『六歌仙』の場合には衣裳を替えますけれども、「懸物揃」では衣裳を替えません。懸物——掛軸に描かれている絵を素で全部踊り分ける。こういう技術を確立した人でした。

二代目嵐三五郎と沢村国太郎も佐渡島の弟子でした。『蝶の道行』『女夫狐』という技巧的な踊りを完成させたコンビでした。

それに続いて友五郎の時代には一体どのような踊りがつくられたのか。今日はその話をしようと思います。

三代目中村歌右衛門はお弟子さんではありません。友五郎の兄貴分で大坂を代表する俳優です。四代目歌右衛門、二代目富十郎、嵐璃玉など、歌舞伎の有名な俳優はその多くは友五郎の弟子でした。

山村の舞踊の特色を、①歌舞伎の振付、②花街の振付、二つに分けて話をしましょう。

友五郎のデビュー作は、大切景事『覚てあふ羽翼袈』という三段返しの大がかりな舞踊曲でした。大坂の舞台は江戸より広く、大道具も立派でした。「初の段」は安芸の宮島の楼閣、前も後ろも見渡す限り海です。前半は三人の蟹が巖島の名所を八景になぞらえて踊ります。後半には船が出てきま

す。船の上には甲州の石和からやってきた鵜飼がいる。大小の鼓の入った鳴物でリズムカルに「鵜の段」を踊りました。

浅葱幕の振り被せで繋いで、大道具の準備ができると浅葱幕を振り落とします。「中の段」は舞台一面、舞台の奥までが立体的な桜並木になります。三組の仕丁の夫婦、六人の「三人上戸」——泣き上戸、笑い上戸、怒り上戸になりました。

「後の段」は「鴛鴦」の所作事です。舞台全体が川の流れ——溪流になります。両花道には杜若がセリ上がってきます。両花道と本舞台に三組の「鴛鴦」の夫婦がセリ上がり「鴛鴦」の狂いを見せる。このようなレビュー形式の大掛かりな舞踊曲を完成させた人でした。

二つ目は、江戸の変化舞踊です。三代目歌右衛門は大坂に帰ってきて『慣ちょっと七化』を出しました。「七変化」は大坂では「七化(ななばけ)」と呼ばれます。「慣」は「見習うて」と読みました。「江戸で習ってきた七変化を、ちょっとやってみます」と言って踊ったものでした。変化舞踊から大坂の風俗舞踊は発生しました。代表曲は『土瓶の鑄掛』です。おじいさんとおばあさんの土瓶の鑄掛屋、当時の風俗を踊りにしたものです。歌右衛門はおじいさんの役で出てきまして、手に団扇を持っています。団扇の絵のところを見ていただくと、おばあさんの顔が描かれていますでしょう。おじいさんの振りを踊ったあと、団扇で顔がおばあさんになると、今度はおばあさんの振りになる。これをまた取ると、おじいさんの振りになる。このような内容の舞踊でした。

三番目は人形振りです。近松門左衛門の『心中重井筒』で徳兵衛を歌右衛門が人形振りで踊りました。人形芝居の舞台には「手すり」があります。この手すりを厚くして、手すりの上に人形のように歌右衛門自身が乗って踊りました。ですから、いま皆さんがお考えになる人形振りとはちょっと違うのです。舞台は遠近法を使った「四つ辻」でした。徳兵衛には奥さんと愛人がいます。奥さんのほうには生姜酒、愛人のほうには卯酒、卯酒に行こう、いや生姜酒へ行こうか、この手すりの上をウロウロウロウロしているうちに、着ている羽織がパラッと落ちてしまう。こういう人形振りを作った人でした。

四番目は、純粹な踊りではありません。義太夫狂言の中で物語というのがあります。友五郎はそれに踊りの振りを付けました。『先陣藤戸誉』というのは書き下ろしの義太夫狂言です。佐々木四郎高綱は、一体海の上を渡るにはどういふ馬術が必要なのか、その秘術をみんなの前で物語ります。まず俳優がせりふを言います。そうすると次に義太夫のチョボが語ります。残っている台本を見ますと、せりふ、義太夫、せりふ、義太夫とずっと

ありまして、最後に「と振りで踊る」と書いてあるんですね。こういう振りを考えた人です。

五つ目は、「メリヤス」の振りです。代表的な作品は『妹背山』の「御殿」のお三輪でした。お三輪という町娘が高貴な人に恋をしてしまった。でもその人は、いま、お姫さまと結婚する。それで、みんなにばかにされて、たった一人どうしようと思ったところに、どこからともなくさびしい音楽が聞こえてくる。これを「メリヤス」と言ったのです。このような舞踊も、友五郎が作りました。

続いて、花街の舞踊について話をしましょう。井原西鶴は、「京の女郎に江戸の張を持たせ大坂の揚屋で逢はば、この上なにかあるべし」と言っています。大坂は揚屋の座敷が立派でした。江戸ですと四畳半で、爪弾きで女と差し向かいになりますね。そうじゃなくて、踊り子たちが勢揃いして派手に踊る。こういうのが大坂の花街の特色でした。友五郎が子どもだった頃、江戸から新しい長唄というのが入ってくるのです。この長唄は、二つの要素があります。一つは、さっき言った「メリヤス」ですね。非常にしんみりとした、そして爪弾きをするような。これは実は大坂にはなかった。これは「江戸駒」——三味線にギターのガットのようなものをかける、これを「駒」と言うのですけれども、「江戸駒」といまして、音が低くなる駒をかける。

こういうものがあるとすると、もう一方では、今度は「チリカラ」というのが流行しました。これも江戸からきた新しい技法でした。「チリカラ」というのは鼓の音です。大小の鼓を「トツタン」「トツタン」と大間に打つ従来の技法とは違い、早間に「チリカラ」「チリカラ」と打ちます。この「チリカラ」が流行するのです。そして、この「チリカラ」を使って新しい舞踊を子どもたちに教える。あるいは「メリヤス」を使って新しい踊りを子どもたちに教える。

ですから、いまでも山村を代表する舞というのは、しっとりとした座敷舞と、「作物」と言って滑稽なりズミカルな踊りがございますよね。こういったものも偶然生まれたのではなくて、それまでの大坂の音楽に江戸の音楽が入ってきた。そしてそれを自分たちのものにするんですね。どうしたかといいますと、江戸では長唄のほかにも清元ですとか常磐津ですとか、ジャンル分けになりますね。関西はそれを一人で歌うようになったのです。これが「江戸唄」です。

では、そういう教わっている人たちが一体どこでその芸を披露するのか。大きく分けて三つあります。

一つはお座敷ですね。お座敷の舞については、これから実際に見ていただけたと思いますので、

ここでは省略します。

お座敷以外に何があるかという、お濑い会です。その流れを汲んでいるのが京都の歌舞練場の舞です。三つ目はお祭りの「練り物」です。資料三枚目の表、これが練り物の資料です。五枚錦絵が出ていますけれども、上の三枚は、一番右側が大坂の南の繁華街であります島の内のお祭りの練り物です。若さんのお家は、山村の中の島の内の山村、「島山村」と呼ばれる系統のお家です。ですから、芸妓さんがこういうかっこうをして、練り歩いたわけですね。

真ん中は、大坂のやはり繁華街の、これは廓ですけれども、遊廓の新町の練り物です。ですからこれは芸妓じゃなくて遊女ですね。いちばん右端は大坂ではなくて京都です。京都でも友五郎は振付をしています。下の二つは何かといいますと、練り物の錦絵なのですけれども、それぞれの絵の右上に上から垂れ下がっているものがありますね。そこに説明が書かれているのです。その扇の下の右側に書かれているのが「山村吾斗好み」。吾斗は友五郎の隠居名です。すなわち、ファッションデザイナーとしても山村吾斗は有名な人だったのです。

最後に紹介するのは山村流のお濑い会の記録です。東京都立中央図書館蔵の『舞子観世水』という一冊の写本です。それを紹介して終わりにしたいと思います。

挿絵を見ていただくと、これが二つのお濑い会の舞台を写したものです。いまと違って、大きな料理茶屋を借ります。これは二つの会場でやった二つのお濑い会です。二つのおさらい会では、この評判記に取り上げられた人だけでも、舞子さん、芸妓さんが七〇人に及びます。曲数が四二曲。実は、舞子、芸妓さんは七〇人出ているのですけれども、曲数が描かれていない人がいますから、たぶん四〇曲以上出たのでしょうね。まだ初心の方は、かわいらしい踊りだけを踊ります。上手い人になると、せりふ入り。歌舞伎みたいな踊りを踊ります。そして、特殊なものになると、『羽根の禿』から『半田稲荷』に引き抜いて踊っていました。

以上、駆け足になりましたが、大阪の舞踊の流れを振り返ってみました。